

《書評》

『万国博覧会と「日本」：アートとメディアの視点から』

暮沢剛巳\*・飯田豊\*\*・江藤光紀\*\*\*・加島卓\*\*\*\*・鯖江秀樹\*\*\*\*\*・

　　ウィリアム・O・ガードナー\*\*\*\*\*著、勁草書房、2024年

磯 達 雄<sup>†</sup>

美術史、メディア論、社会学など、複数の分野にまたがる研究者たちによる、日本の万国博覧会についての論考を収録。万博に関してはすでに多くの書籍が出ているが、本書ではこれまで日の当たっていなかったテーマを、それぞれに掘り下げて論じている。

飯田豊は、ともに〈映像博〉と呼ばれた1970年大阪万博と1985年つくば科学万博を比較する。万博のパビリオンで上映された映像は、しばしば特殊な方式を採用しており、再現が難しい。論じにくい対象だが、ここでは資料や証言をもとに〈映像博〉の意味がどのように変わっていったかを浮かび上がらせている。

江藤光紀は、1995年の開催予定が都知事の決断により中止に追いやられた東京世界都市博で、総合プロデューサーの泉眞也が何を目指していたのかを追う。「都市」への着目は2010年の上海万博に先行するものであり、さらに評価すべき人物だろう。

加島卓は、1970年大阪万博と2025年大阪・関西万博におけるシンボルマークの選考過程を検証する。そこには専門家から市民参加への変化が見られるという。公共施設の建設プロセスと同じ状況が生まれていると言えそうだ。

鯖江秀樹は、1970年大阪万博のフジパン・ロボット館を取り上げ、展示ロボットの制作者だった相澤次郎に焦点を当てる。戦前からロボットづくりに情熱を燃やした人生は、非常に興味深いもの。磯崎新が設計した、お祭り広場のロボット型展示装置「デメ／デク」についてもアドバイスしていたとは知らなかった。

暮沢剛巳は、原子模型をシンボルタワーにした1958年ブリュッセル万博から1970年の大阪万博へ、核の表象がどのように変化したかを論じる。太陽の塔の背面に描かれた黒い太陽などに見られるそれは、肯定と否定の両方を示しているという。

\* 東京工科大学デザイン学部教授

\*\* 立命館大学産業社会学部教授

\*\*\* 筑波大学人文社会系准教授

\*\*\*\* 筑波大学人文社会系教授

\*\*\*\*\* 京都精華大学芸術学部准教授

\*\*\*\*\* スワスマオ大学教授

<sup>†</sup> 建築ジャーナリスト

tatsuoiso@mac.com

ウィリアム・O・ガードナーは、1970年大阪万博について、SF作家、建築家、芸術家、学者などの人的ネットワークが万博をつくり上げ、万博からまた未来学や情報化社会論などといった分野が発展していったことを明らかにする。

本書の元になった科研費プロジェクトのタイトルは「万国博覧会に見る『日本』——芸術・メディアの視点による国際比較」だった。国際比較により「日本」を浮かび上がらせるとの狙いはよい。今世紀に入って、中国、カザフスタン、アラブ首長国連邦など、欧米以外での万博開催が増え、その意義も変わってきていると考えられるからだ。しかし本書において国際比較は、結果として深められなかつたように思う。あとがきで、2021年のドバイ万博を視察する予定だったが、コロナ禍により中止となったことが明かされている。実現していれば、本書の内容はより充実していただろう。その点は残念である。